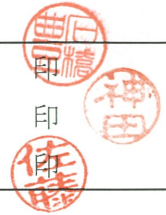


論文審査及び最終試験又は学力の確認の結果の要旨

①・乙	氏名	岡田 大司
学位論文名	Prognostic Impact of B-Type Natriuretic Peptide in Elderly Patients with Severe Aortic Stenosis	
学位論文審査委員	主査	石橋 豊
	副査	神田 秀幸
	副査	佐藤 秀俊



<論文審査の結果の要旨>

大動脈弁狭窄症（AS）は、近年わが国の高齢化に伴い増加しており重症ASは心不全症状が出現した場合には予後が急激に悪化する。重症ASの治療は、人工弁置換術が唯一の治療法である。しかし、高齢患者では活動度の低下のため自覚症状が現れにくく手術のタイミングが遅れる可能性があり、病状の早期把握が重要となる。申請者は、高齢AS患者において心不全マーカーである血中B-type natriuretic peptide (BNP)値に注目し、予後との関連について検討した。2008年1月から2013年12月に初めて重症ASと診断された75歳以上の患者を対象に後ろ向きに解析し、心臓死、心不全入院、大動脈弁置換術をイベントとし血液採取後の730日まで追跡調査した。最終的に登録した88名の患者(平均年齢84±4歳、男性が33%、無症状51%)において、27名(31%)にイベントが発生し、その内訳は心臓死11名(13%)、大動脈弁置換術8名(9%)、心不全入院23名(26%)であった。イベント群は非イベント群と比較し、より高齢で症状が重く、利尿薬の使用が多く、ASの程度がより重度、中等度以上の僧帽弁逆流と肺高血圧症の合併が多く、BNPがより高値であった。ROC解析にてBNP 234 pg/mLがイベント発生予測のカットオフ値であった。この値でLow BNP群、High BNP群に分けて分析した結果、Low BNP群での心臓死1名(2%)、心不全入院7名(15%)に対し、High BNP群では心臓死10名(25%)及び心不全入院16名(40%)とイベント発生が有意に多いことが判明した。イベント発生を目的とした多変量解析では、大動脈弁弁口面積とBNP 234 pg/mL以上が統計的に有意な因子となり、両者は重症AS例での2年間のイベント発生の独立した予測因子であった。

以上から、血中BNP値は、75歳以上の重症AS患者においてイベント予測因子となり得ることが明らかとなった。本研究は、自覚症状からの重症度評価が難しい高齢重症AS患者の予後予測において、BNP測定の臨床的有用性を明確に示した。

<最終試験又は学力の確認の結果の要旨>

申請者は、高齢重症AS患者での血中BNP測定がその予後予測に有用な因子であることを示し、BNP測定が重症AS例での適切な治療時期の早期判断に資することを明らかにした。発表での質疑は的確で、関連知識も十分であり学位授与に値すると判断した。(主査：石橋 豊)

申請者は高齢かつ重症 AS 患者において、心不全のマーカーである BNP の診断価値に着目し、そのスクリーニング精度について後方視的に検討した。BNP の定期的な計測により、症候性心不全の早期発見に資する重要な知見を得た。学識は十分であり学位授与に値すると判断した。(副査：神田秀幸)

申請者は当地域（医療圏域）でとても罹患者が多い高齢者の重症大動脈弁狭窄症患者において、日常臨床で簡便に検査が可能な心不全のマーカーである BNP の計測により、臨床症状が出現してから死亡に至るまでの時間が非常に短い症例の判別の指標として臨床応用できることを示すことができ、今後の日常臨床に役立つ論文を作成した。学識は十分であり学位授与に値すると判断した。(副査：佐藤秀俊)